Nagoya University

加速器質量分析法による古筆切および古文書の^{14}C年代測定

池田　和臣[1)]・小田　寛貴[2)]

1）中央大学文学部　Tel&Fax:03-5382-8422
2）名古屋大学年代測定資料研究センター　Tel:052-789-2578
Fax:052-789-3095

1　はじめに

古典文学の研究（文学研究のすべてと云ってもよい）にとっての不可欠な基礎研究に、本文整定がある。本文（テクスト）が定められなければ、読むことができないからである。

江戸時代初期には、文学作品が版本という形で出版され始まるが、それより前は、書写による写本で、書き写し継がれるのが一般であった。そのため、書写時の不注意による誤写や意図的な書き改めなどによって、本文は変化してゆく。書写がくり返されればくり返されるほど、本文は作者の原典から離れてゆく運命にある。そのような運命にある本文を、作者の原典に近づける研究が、本文整定の研究だと云える。

本文整定のために、古典文学研究者は、より作者の書いた原典（オリジナルテクスト）に近い時代の、より古い時代の写本を探そうとする。しかし、なかなか古い時代の写本はみつからない、というより存在そのものが稀少である。特に、平安時代の作品は、平安時代末までに書写された写本はほとんど残っておらず、もし、完本が残っていれば間違いなく国宝である。鎌倉時代に書写された写本すら稀少な存在となっているのが、現状である。古くて完全な写本を探すのは不可能なのである。

しかし、古筆切というものがあり、本文研究上大きな意味をもつ場合がある。平安時代や鎌倉時代に、和歌や物語を書写した本は、古く美しく稀少な筆跡ということで、お茶会の折に掛け軸として鑑賞するため、あるいは古筆手鑑という古筆切のアルバム帖として鑑賞するために、室町時代頃から、写本の一頁一頁を切断し、一頁の表裏をひき剥ぐということがなされてきた。つまり、古い写本は、一枚一枚の断簡として少なからぬ量が伝来することになったのである。これらを古筆切という。この古筆切を集めることで、原典により近く古い時代の、本文の姿を研究することができるのである。

そして、古筆切には極め札というものが付いている。古筆鑑定家によって誰が書いたものかを認定したものである。しかし、古いものほど根拠がなく当たっていない。また、古く平安時代に書写された古筆切や、文学史上有名な人物、たとえば藤原定家とか西行とか紀貫之とかが書いたとされる古筆切は、高価な値いで取り引きされるので、後代の模写（写し）や、悪意で捏造された偽物が沢山つくられている。

そういう事情があるので、古筆切を古典文学の本文研究として使うにあたって、古筆切の書写された年代を科学的に明確にし、後代の模写や悪意による偽物を取り除く必要がある。

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

そこで、今回は、二つの目的意識をもってAMS^{14}C年代測定を行った。①AMS^{14}C年代測定の古筆切資料に対する正確度・有効性を確かめるために、歴史的書写年代が判明している古筆切・古文書についてのAMS^{14}C測定を行う。②年代不明の古筆切資料、あるいは後代の模写（写し）の疑いのある古筆切資料の書写年代を明らかにするため、AMS^{14}C測定を行う。①の目的のためには、書写年代がある程度判明している資料が必要で、2－（1）から2－（3）の資料がそれにあたり、②の目的のための資料が3－（1）から3－（3）である。なお、これら資料はすべて池田和臣架蔵である。

2　歴史的書写年代の判明している資料

（1）因明問答抄

この因明問答抄の書写された古文書は、料紙は楮紙、仮名消息の裏面を利用して、仏書因明問答抄が書かれている。ツレ（同じ書物から切り取られた、元はともに一冊の、あるいは一巻の一部を構成していたもの）が残されており、そこに記されている奥書によると、因明問答抄の原典は、保元元年（1156）九月に大法師蔵俊によって作られたこと、そして当該資料は正和四年（1315）九月に権少僧都信懐によって書写校合されたものであることが判明している。反古（古手紙）の紙背を利用したものであるから、むろんその料紙は正和四年(1315)よりも、いささかさかのぼる物でなければならない。

測定の結果は、656±22〔BP〕であり、西暦に換算した較正暦年代はAD1295～1304年頃に相当する。ツレの奥書にある書写年1315年より少しさかのぼる結果であり、AMS^{14}C測定の正確度の高さが認められる。

（2）因明問答抄のツレと想定される仏書紙背仮名消息

これは、資料2－（1）と同時に入手したものゆえ、2－（1）のツレであろうと思われたが、仮名消息の筆勢・字体に平安末期から鎌倉初期に特有の鋭さがあり、書写年代に不審が残るため、（1）とともに測定を行った。結果は843±18〔BP〕で、西暦に換算した較正暦年代はAD1189～1203年頃に相当する。仮名消息の書風から推定された平安末期から鎌倉初期という年代が裏付けられ、資料2－（1）のツレではないと判明した。

（3）中院宣胤筆奥書切

これは、何かの写本の奥書の部分であり、文亀元年（1501）に、中院宣胤が記した現物と判断される。その根拠は、①筆勢・墨色に不自然さがなく、花押も確かであること、②記された文言の中に「亀寿の所望に依って禿筆を染めた」とあるが、宣胤の日記『宣胤卿記』の文亀二年（1502）四月二七日の条に、「亀寿丸」という人物が出ていて、この奥書の内容にも疑うべきところがないことである。測定結果は348±18〔BP〕で、較正暦年代はAD1487～1523年頃である。奥書にある1501年を含みこむ測定結果であり、AMS測定の正確度の高さが認められる。

以上、2－（1）と2－（3）の歴史学的年代の判明している資料の測定から、AMS^{14}C測定の正確度の高さが証された。

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

3　書写年代不明の古筆切

(1) 藤原実方家集切

これより以下、書写の歴史的年代の判明していない古筆切、後代の模写（写し）の可能性のある古筆切について述べる。まず、平安時代の歌人藤原実方の歌を集めた実方家集の断簡。これは、書風から見ると高野切第二種系統で、正しい資料なら11世紀後半に書写されたものと考えられる。実方家集の写本の断簡としては特別に古いものであり、本文価値は非常に高いものになるのだが、筆線が少々生硬に感じられ、後代の模写あるいは偽筆の可能性が皆無ではない。

ところで、これのツレ（同じ写本から切り取られた別の頁）が、たった一枚ではあるが、京都の北村美術館にあり、『古筆学大成』ではそれを平安時代書写としている。現物を調査させていただいたところ、やはり、架蔵と同筆のツレと思われた。しかし、書写年代を決定する根拠は何も得られなかった。

ところが、測定作業の結果が出る前、1999年12月に刊行された『冷泉家時雨亭叢書』（藤原俊成・定家以来の貴重な古典籍を伝える、京都冷泉家の蔵書の写真版）の中に、平安時代書写の実方家集があり、なんと3－（1）および北村美術館のものと全く同じに書かれた頁がそこに存在したのであった。つまり、冷泉家に平安時代の書写にかかる、3－（1）および北村美術館蔵のものの原本が、完全な形で存在していたのであり、ということは、3－（1）も北村美術館蔵のものも後代の写しであるということが判明したのである。

^{14}C測定結果は202±20で、較正暦年代はAD1661～1673年頃に当たる。この頃には、近衛家熙（1667～1736）という古筆の臨書や収集に熱をあげた有名な人物がいた。彼は料紙などにも特別な気をつかい、古筆の写しを精力的におこなったことが知られている。3－（1）の資料は斐紙（楮紙のように、数年でカゼを引くことのない上質な紙）であるので、少し古くなった紙を使って家熙が臨書した可能性がある。

(2) 伝藤原定家筆　古今集抜書切

資料3－（2）は、藤原定家筆と極められた、古今集の恋歌ばかりを抜き書いたものである。本物であるなら、定家の若い頃の筆跡に近く、1200年頃の筆写ということになるが、どうも定家らしくないところ、「連」（れ）や「遣」（け）等の文字のくずし方が定家のくずし方とは異なるという疑問点があり、測定にかけることにした。

結果の出る間に、これとよく似た筆跡の資料が、藤原定家真筆の新資料として、論文に紹介された。これは古今集ではなく、源氏物語の中の歌ばかりを抜き書きしたものであるが、料紙の様態（天に二本、地に一本の横線が引かれている）や、字形の全くの一致から、3－（1）のツレと判断された。これを、その論文は定家真筆として、そこに書かれた源氏物語の和歌の本文異同から、源氏物語の本文系統についてまでの憶測をひろげている。しかし、定家筆といわれるものには、定家が歌道の上で神格化されたため、後代の偽物や模写がきわめて多く、どれ程用心してもしすぎることはない。

測定結果は240±23〔BP〕で、較正暦年代はAD1647～1663年頃である。やはり、ずっと

NII-Electronic Library Service

Nagoya University

後代のものであった。同じ内容をもった定家筆の原本が知られていないので、定家筆の原本を模写したものかどうかも、判断できない。まだしも原本の模写であるなら、原本が失われたしまった場合には資料的価値がでるのだが、これはまっかな作り物、悪意による偽物である可能性もある。

ともあれ、AMS^{14}C測定によって、定家筆の資料から、偽物を排除することが出来たのである。

(3) 伝二条為氏筆　散逸物語切

この資料は、物語の断簡であるが、現在知られているどの物語とも一致しない。散逸物語と呼ばれる、現在に伝わらず滅びさってしまった物語が平安時代から室町時代までの間、沢山存在していたことが判っており、その中のひとつかと思われる。しかし散逸してしまった物語であり、内容面からは全く研究の糸口がつけられない。せめて、この断簡の書写された年代がわかれば、いつ頃には成立していた作品なのかが判明する。それで測定にかけることにした。

結果は766±23〔BP〕で、較正暦年代はAD1258～1280年頃である。鎌倉時代中期の年代であり、かなり古い時代の写本の断簡であると判明した。ちなみに、かの有名な竹取物語でも、残っている写本の中の最も古い物は、室町末から近世初期にかけてのものにすぎない。数枚しか残っておらず貴重視されている竹取物語の古筆切も、南北朝頃のものと考えられており、鎌倉期に書写された物語の本文は、それだけで貴重なのである。鎌倉時代中期にさかのぼる資料3－（3）は、高い本文価値を有するものであり、ツレが一枚でも多く出現することを期待する。

4　結び

以上、6点の古筆切・古文書の測定結果から、AMS^{14}C測定の正確度が確認され、また、古筆切の中から後代の模写や偽筆を排除するのに有効であることが確かめられた。

謝辞

この小稿を成すにあたり、共同研究を引き受けてくださった名古屋大学年代測定資料研究センターの中村俊夫教授に感謝いたします。また、この研究の一部には、日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究（A）、課題番号12780106、研究代表者：小田　寛貴）を使用した。記して感謝いたします。

参考文献

小松茂美『古筆学大成』全30巻（講談社、1989～1993）
『冷泉家時雨亭叢書　第二十巻　平安私家集　七』（朝日新聞社、1999.12）
田中登「定家筆源氏物語和歌抜書切」（『むらさき　第34輯』武蔵野書院、1997.12）

NII-Electronic Library Service